
G 《ジー》 怪奇譚

らむそじん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G^{ザイ}怪奇譚

【コード】

N1236W

【作者名】

らむそじん

【あらすじ】

とある大学生の、怪奇話です。

Gを知っているだろうか。
特徴はこうだ。

地球上のどこにでも蔓延っている。

長い歴史を持っている。

世界最強の生命体。

私はやつらを、畏怖の念を込めてこう呼ぶ。
G、と。

私が今住んでいるアパートに越してきてから、もう三年半が過ぎた。都心から少し離れた場所に建っている家賃三万円のアパートだが、駅から近く、大学に通うにはもってこいだだったので、高校卒業と同時に上京してきた私は、迷わずここへ入居すること決めた。不便はいささかもない。ただ、少しオンボロである。

今日も学校帰りに立ち寄ったスーパーで晩飯を買い揃え、白い袋を引っさげて、私はそのオンボロアパートに戻ってきた。外壁はどこどころひび割れ、誰の悪戯か、ペンキでラクガキが施されている。いつ見ても、不愉快な画だ。

狭い入り口をくぐり、薄暗い廊下を進むと、突き当たりに階段がある。それを上った先、一番手前の扉が私の部屋である。鍵はかかっている。どうせこんなオンボロ屋敷に泥棒なんて入りやしない。ドアノブに手をかけ、扉を引いて、身体を部屋の中へと進めようとした。

「こんにちは、井上さん」

出し抜けに後ろから肩を掴まれた。振り返ってみると、見知らぬ白髪の男が朗らかに笑っていた。

「誰、ですか」

「新しくこのアパートの管理人となった高崎です。始めまして」

「管理人さん、変わったんですか」

「はい、以前ここを管理していた宮元さんがお亡くなりになりましたね。昔からの友人の私が後を引き継ぐことになったんですよ。と、いつても私もこの年です。そう長くはないかも知れませんが、よろしく願います」

「ああ、はい。こちらこそ」

軽く挨拶を終えると、管理人を名乗る老人は、おぼつかない足取りで階段を降りていった。

いやはや驚いた。

入居してはじめて管理人と出会ったからだ。一階の廊下にある共同トイレはドアがぶれて開けっ放し、三回に一回は水が流れないし、おまけに外壁のラクガキを放置したまま。そんな誰の所有物かすら危ぶまれるこのオンボロアパートに、まさか管理人なるものが存在していたのだ。とはいえ、家賃を滞りなく支払い続けている私にとっては、管理人の存在などどうでもよいことだが。

部屋に入ると、台所の上に食材を置いてとりあえずクーラーとテレビをつけた。

「くそ、またたかってるのか」

残飯に群がっている蠅にスプレーをお見舞いする。散らかった空き缶や雑誌を足蹴にして、座る場所を確保してから、私は敷布団の上で腰を下ろした。

「今日も、来てくれないのか。香織は」

二年前から音信不通である。とても献身的な女性だ。料理が得意で、よくこの部屋に飯を作りに来てくれた。掃除は彼女にまかせっきりだった。ことあるごとに、片付けるだの、風呂に入れたの、口酸っぱくいいい聞かされていた。今でも、耳の奥から声がする時がある。きつと幻聴だろう。

「いつまで待たせる気だ」

私はまだ飲みかけのコーラ缶に手をかけ、それを一気に胃の中へと流し込んだ。刺激のない甘ったるい味がした。

しばらくテレビを楽しんだ後、私は立ち上がり晩飯の支度を始めた。

ふと流し台の網の中でもがく、ゴキブリを見つけた。まだ小さ目のやつだ。水を流すと、必至で上に登ってこようとす。

「そうは、させるか」

熱湯に切り替えて、あぶり焼きにしてやる。しかしとても食べえそうもない。

結局、動かなくなったので放って置くことにした。

飯を完成させて、ダンボールでこしらえた食卓の上に並べる。

「いただきます」

卵焼きを白ご飯の上に乗せて、バターとしょうゆをかけて食べる。定番メニューだ。おかずは、もずくに沢庵、そして豆腐。この三点は栄養が豊富で欠かせない。それと今日は用意していないが、ヒジキ。これがあれば白ご飯三倍は食える。

そういえば以前、香織が激怒したことがあった。二人で食事をしていた時のことだ。

私が、ヒジキはゴキブリの足にそっくりだ、という旨の発言をしたら、香織は立ち上がって私の頬を思いっきりはたいて、そのまま家に帰ってしまった。

なにもそこまで怒ることもないだろう。

あの後、二人の関係は少し険悪となった。それから二ヶ月ばかり経って、香織は姿を消した。

今頃なにをしているのだろう。男をほったらかして二年も、どこをほつつき歩いているのだろう。

「帰ってきたら、張り倒してやる」

私は毒づいた。

食事が終わり、トイレを済ませてから、布団の中へと潜り込んだ。まだ八時過ぎだが特になにもすることはしない。明日は講義も入っていないため、一日中睡眠しようと思う。寝る子は育つのだ。

闇の中に突っ立っていた。

辺りは、暗く、なにも視界に認めることは出来ない。

「おい、誰かいるか、いないのか？」

私は手探りでゆっくりと前へと進んだ。裸足で、ヘドロのようなものを踏みながら、どこか腰を落ち着けることが出来そうな場所を探した。

途中、小さな光を見つけた。地面に浴槽ほどの穴があって、その中から突き上げるように光が漏れていた。

私は、そこまで行って穴を覗いてみた。

すると七・ハメートルほど下のほうに人が倒れていた。長い髪、細い腕に白い服を着た女性。

即座に、私は気がついた。

「香織、香織じゃないか」

私は呼びかけた。

女性は、苦しそうに身体を起こして、こちらを仰ぎ見た。

「裕ちゃん、なの？」

「やっぱり香織じゃないか。なにやってんだそんなところで」

「分からないわ。ただ、気づいたらここにいたの」

澄んだ、綺麗な声。懐かしい声だった。ようやく香織が帰ってきたのだ。

「そこから上がってこれるか」

「だめ、足が痛くて動けないの」

頭を振って、香織が答えた。

「待ってる。今なにか縄のようなもの取ってくるから」

「早くして、お願い！　じゃないとやつらが帰ってきちゃう」

私は急いだ。香織を一刻も早く助けてやりたかった。足を怪我しているらしい、病院に連れて行ってやらねば。

とはいえ、辺りは一つの穴を除いては、ただ暗闇が無造作に広がっているばかりである。方向感覚すら失われる漆黒の世界で、どこへ進めばいいのか皆目検討がつかなかった。

私がかがんでヘドロの中を探ってみた。腕を差し込んだ途端に、それは一気に飛散した。逃げるように、私の手から遠ざかろうとするもの。おぞましいほど大量の、ゴキブリであった。

私が踏みしだいていたのは、ゴキブリだったようだ。余りにも多くのゴキブリは、もはや黒い一つの地面と化していた。堅くもなく、しかし柔らかくもない。背中羽はむしろ弾力性があって、私の指先の間を滑らかにすり抜けていく。手足の小さなとげが当たって、少しこそばゆい。そいつらは、地面を猛烈なスピードで這いずり回り、ただ私の魔の手から逃れようと必至に前進を続けていた。

「くそっ、だめか」

使えそうなものはなかった。私は舌打ちをして、一度、香織が待っている穴へと引き返した。

「香織、どうしても立ち上がれないのか。両側に手足をかけて、登ってこれないか」

「やろうとしたわ。でも、下半身が一つもいうことを利かないの。痛みはなくなってきたけど」

どうしたものか。私が一度下へ降りて、香織を担ぎ上げ登ってこようか。しかし、女とはいえ大人である。この高さを背負って上がって来れるだろうか。

「お願い、裕ちゃん。早くして！ やつらが、もうそこまで来てるの」

香織が指差した先、穴の底には洞窟のようなものがあつた。そこから、眩しいほどの光が溢れ出している。

「香織、その穴から入ったのか、それともここから落ちたのか？」

「分からないわ。ただ気づいたらここにいたの」

「じゃあ、その穴をくぐって外に」

「それは嫌！ 絶対、嫌！ 自分から向かって行くだなんて嫌！ 早くしないと、お願い早くして、裕ちゃん助けて」

壮絶な拒絶。香織はうずくまり、悲痛な声を上げる。その様子を見て私は、彼女の精神状態が正常でないことを悟った。なにかにひ

どく怯えているみたいだ。

「早くしないと、どうなるんだ香織。なにかその穴から出てくるのか」

「嫌、いわないで！ 来ちゃう来ちゃう来ちゃうの、早くしないとやつらが！ やつらがここに、暗くて、黒くて、醜いものが」

「落ち着け、香織。いいか、今すぐにそっちへ行つてやる。もう少し待つてろ」

「早くして、裕ちゃんお願い助けて！」

私は走り出していた。香織がいる穴と、どこか他の場所にある穴が繋がっているかもしれないと思いつたからだ。保障はない。しかし、行かねばならない。今、彼女を救えるのは私しかない。

直線的に進んだ。香織がいる穴の光が遠ざかって見えなくなってしまうても、ちゃんと戻つてこられるように、むやみに方向を変えることは出来なかった。

しばらく行くと、もう一つの光を見つけた。

私は四つんばいになって、その穴を覗き込んだ。

同じぐらいの深さの穴だった。底には、一人の女性が倒れていた。

「大丈夫、ですか」

伺うように私が声をかけると、その女性はおもむろに顔を上げた。生まれて初めて、絶句というものを知った。

声が声にならない。あまりの衝撃に、私はその女性の　その幼い少女の顔を、ただ黙視することしか出来なかった。

顔面の皮膚は焼けただれ、鼻は削ぎ落とされたように平らで、目玉が骨の奥からむき出しになっていた。長い前髪から覗くその恐ろしい形相は、怪物と呼んでも誰も否定は出来ないだろう。同じ人間として見ることさえ、困難に思われた。

「君は、なんでそこにいるの」

動揺を極力抑えながら、その少女から情報を引き出そうと試みた。なにか知っているかもしれない。

しかし、少女はなにも答えない。ただ、静かに私の顔を見つめ返

してくるばかりである。

「そこから、どうやって入ったのか分かるかい？ どうやってたら出られるのか、教えて欲しいんだけど」

私の問いかけによやく反応したのか、少女の唇が大きく動いて、歯ぐきが露わになった。歯並びがもの凄く悪くて、所々歯が抜けていて、壊れたキーボードのようになっていた。気持ち悪かった。

「あたいはねえ、上に行きたいんじゃない」

「上ってくる方法があるのか。教えてくれ」

すつくと少女が立ち上がった。足を怪我をしているわけではなさそう。

「あたいはねえ、上にいきたいんじゃない」

少女は無表情で、私に再度そういった。

「どうやって、上ってくるつもりなんだ」

まさか、今から両壁に手足を引っ掛けて、こつちの上つて来る気ではないだろうか。私は少し身じろぎした。もし仮にそうなら、ここを走り去るつもりだ。あんな化け物少女と一緒にはいたくない。

「あんたがあ、いたら上に行けないけえ、こつちから行くことにはんだあ」

いって、少女は光が溢れ出している洞窟のような穴を指差した。

「その中に、出口があるのか？」

「もう一つの穴に繋がってるだあ」

それだけいい置いて、そそくさと穴の中に入って行ってしまった。焦燥感に襲われた。

もう一つの穴。私の予想は当たっていたのだ。そして、今あの少女が向かった先には。

私は全力で駆け出していた。来たときよりもさらに速く、ゴキブリの床を蹴り上げながら、一目散に香織が待っている場所へ向かった。

「あれが、香織がいつていたやつだったのか。早く、助けないと」

あんなのが香織の前に現れたら、香織は間違いない気が狂うだろ

う。既に、正常ではないぐらいだ。取り乱して、そのまま舌を噛み切って死んでしまうかもしれない。いや、それだけじゃない、あの少女がなにか危険なやつだったら、一体どうするんだ。早く、早く逃げ。

遠巻きに小さな光を捉えた。

と同時に、聞き慣れた人間の 香織の絶叫が、こちらにまで響き渡った。

少女がもう既に着いてしまったのか。いや、そんなはずはない。私がいだけ必至に走っているのに、あの小さな少女が私以上に速いなんて、考えられない。

ようやく、最初の穴に戻ってきた。すぐさま中を確認した。

「香織！」

「いやあ！ 来てる、来てる来てる！ 近づいてきてる！ 早く、早くお願い早く助けて！」

「落ちて着け香織！ まだ大丈夫だ。こつちまでそうとう距離がある。今、行く。降りるから少し隅に寄っててくれ」

荒くなった息を抑えながら、私は浴槽ほどの穴の両壁に手足を突き立て、滑り降ちるように下降を開始した。

深さは、ビルの二階、といったところだろうか。降りるのにはそれほど時間はかからなかった。

「来たぞ香織。今、助けてやるからな」

荒々しく私にしがみついてくる香織を、精一杯なだめる。

「もう大丈夫だぞ、香織。そのまま静かにしてろよ」

「早くしないと、やつらが、やつらが。暗くて、黒くて、醜いもの。暗くて、黒くて、醜いもの」

次第に香織は放心したように、一人ぶつぶつと呪文のようにそれを唱え始めた。私は香織を背負って、壁を上り始めた。

両手、両足への負担は想像以上だった。最初こそ容易に、二メートルほど上がることが出来たが、それからはとにかく体力との闘いだった。残り五メートル。上がるにつれて底との距離が広がってい

く。落ちたら、二人ともただじゃ済まないだろう。

私は出来る限り下を見ないようにした。洞窟からあふれ出てくる光で、視界だけは一定に保たれていた。唯一の救いだと思えた。

身体の筋肉がぱんぱんに張って、もうこれ以上は厳しいと感じた。しかし、残り二メートルを既に切っている。滴り落ちる汗が右目に入って邪魔をする。背中の香織は、相変わらず、ただ私にしがみついて、黙々とおかしな呪文を唱え続けていた。

残り一メートルを切った。

手を伸ばせばすぐそこに、到達地点があった。ここで気を抜くわけには行かない。ここで落ちれば死ぬだろう。まだだ、まだ私達は助かったわけではない。

と、私の耳元で、香織の悲鳴が爆発した。

「くっ、香織！」

歯を食いしばり堪えた。

底から差し込む光に、人影が映り込む。

私はとっさに下を確認した。

「あんれまあ、あんたまたあ、いんのがえ」

化け物がいた。洞窟を通り抜けるときに、連れてきたのだろうか。体中には大量のゴキブリが纏わりついていて、黒いものが顔中を走り回っているのが、遠巻きにも視認出来た。

香織が再び暴れだした。私の首を羽交い絞めにする。息が苦しい。

「香織、手を離せ」

「暗くて、黒くて、醜いもの、いやあ！ あいつらが！ あいつらが！」

私は最後の力を振り絞り、壁を上った。酸欠で気が飛びそうになるのを堪えながら、なんとか頂上の床に手を引っ掛けることができた。

唸り声を上げ、香織をまず床に転がした。続いて私も、床に倒れ込んだ。

「助かった、もう、大丈夫だぞ香織」

仰向けに寝転がり、大きく息を吐きつける。背中動き回っているゴキブリなぞ、もはやどうでも良かった。ただ、疲労感と安心感でいっぱいだった。

「もう、動けない。香織、大丈夫か」

ほふく前進で私は、香織に近づこうとした。

と その瞬間、

がしつと、足首を誰かに掴まれた。

振り返ると、穴の中から細い腕が一本、伸びていた。

「うあつ」

振り払おうと足を引く。しかし、がしりと握られたその手は、思ってる以上に強かった。続いて、穴の中からのつそりと、少女の顔が姿を現した。むき出しになった目玉に乗っかるゴキブリ。削ぎ落とされた鼻の穴から覗く触覚。歯と歯の隙間から垣間見える、ヒジキのような手足。もはや人間の呈を保っていなかった。

「離せ、この！ 化け物！」

必至で抵抗した。疲労で足がろくに動いてくれない。

「あたしはあ」

少女が口を開くと中から、喉の奥から、無数のゴキブリが飛び出してくる。

「やめろ！ 落ちろこのつ！ 化け物！」

「あたしもお、助けて欲しいんじゃけえ」

私は蹴り上げていた。掴まれていないもう一方の足の裏を、少女の醜い顔面に叩き込んでいた。みしりと軽い骨が碎ける音が聞こえたかと思うと、少女は天を仰ぎ、そのまま穴の中へと姿を消した。地面に叩きつけられる音が鳴った。

肩で息をしながら、私は重たい手足をあげ、穴の中を覗き込んだ。

「か、香織……」

底に落ちていたのは、香織だった。

私は、錯乱した。なぜ、香織がそこにいるのか理解できない。振り仰いで、背後にいる女性を確認してみた。

幼い少女が立っていた。

少女は、にやりと歯を目いっぱい見せて笑みを作り、私に向かって口を開いた。

「暗くて、黒くて、醜いもの。落ちちゃえばいいんだ」

少女に身体を突かれ、私は背中から、明るい光のある穴の底へと、ゆっくりと落ちていった。

大きな痙攣と共に目が覚めたのは、夜明け前の午前四時半だった。私は、タオルで汗をふき取りながら立ち上がった。

台所で、水道水をコップ半分ほど飲んだ。灯りもつけず、その場に佇む。

「あれは、一体」

いってしまえば、不愉快な夢、それだけだろう。しかし、余りに生々しい感触が、今でも手に足に、体中に残っている。

「香織……」

ふと、流し台の網へと目を留めた。昨日の小さなゴキブリの姿はない。辺りを、見回してみた。すると、ちょうど私と同じ高さぐらの壁の位置に、一匹のそれを見つけた。サイズは小さく、昨日と同じやつだと思えた。

私はすぐに、玄関に並べてある靴を片方取ってきて、それで思いつきり壁を殴り叩いた。力なく壁からずり落ちるそれ。もう死んでいるだろう。

片付けることもなく、私は再度布団に潜り込んだ。まだ朝食まで時間がある。明日は一日中眠るつもりだったが。

「掃除でもしようか、明日は」

それだけいって、私は眠りに着いた。

後日、風の噂で聞いた話だが、香織は交通事故を起こし意識不明の重体だったようだ。今は車椅子生活を送っているらしい。

私の元へはもう、戻ってこないようだ。

(後書き)

もうすぐ九月なのにまだ全然、暑いですね。

ということで、涼しくなる？ホラー小説を作ってみました。

どこかに応募でもしようと思ったのに、短くて送れない……。

仕方がないのでこちらに上げさせてもらいました。

三秒ぐらいでも楽しんでくれたら嬉しいです。

汚ねえんだよ！ 時間返せ！ って方はごめんなさい)。ー。(

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1236w/>

G《ジー》怪奇譚

2011年9月19日03時32分発行